世界の外貨準備から見えること

IMF から世界の外貨準備における通貨構成が公表された。昨年の第三四半期末のデータだ。ここから読み取れるポイントを列挙する。

1. 米ドルの割合（59.15%）は前期とほぼ同水準だった。一昨年末に6割を切った割合はその後にも継続している。ドル金利やドルの為替レートが全般的に堅調な中で、外貨準備ではドル離れの傾向が継続している。外貨準備が為替の中長期のトレンドを反映する指標の一つならば、現在の金利要因が主導するドル相場の持続性にも懸念が生じる。
2. ユーロの割合（20.48%）は前期と同じで、BREXIT 後も安定的に推移している。ユーロは対ドルで下落傾向にあったが、外貨準備の割合にはほとんど影響がなかった。コロナ対策として、ユーロの価値を規定する「成長と安定化協定」を棚上げして財政赤字を膨らませたが、ドルに次ぐ二番手の通貨として地位に揺るぎはなかった。
3. 人民元の割合（2.66%）は前期より増加した。計ったように每期微増している。こうした通貨は今までになかった。人民元の国際化の進展が完全に管理されている証だ。

だがこのペースで進んでも円に追い付くのに6年以上かかる。ユーロ となると35年以上かかる。ましてドルとなれば100年以上だ。ドルと並ぶ基軸通貨を目指しているのなら、時間がかかり過ぎだ。となると増加ペースを上げるか、新しい戦略を採るかになる。増加ペースを上げるとなると資本取引の自由化のペースを上げる必要がある。それはコントロールが難しくなる人民元の増加になる。それは中国当局の方針から外れる。そうなる则ち新しい戦略になる。デジタル人民元はその一つになる可能性がある。

4. 円の割合（5.83%）は前期より増加したが、1年前の水準と同じだ。この間ドル円は105円から111円水準へと円安に推移した。円安傾向だったが円への長期的な需要にはあまり影響がなかったと見ることができる。

5. ポンドの割合（4.78%）は前期と同水準だが、BEXIT 後では増加傾向にある。BREXIT 後、各方面で英国離れが見られると言われるが、資産管理の面で見ればポンド離れは起きていない。
6. オーストラリアドル（1.81%）、カナダドル（2.19%）の割合は前期より微減だが、年単位で見れば増加傾向にある。これはドルの長期低減傾向の中で外貨準備の多極化の流れを反映していると考えられる。

以上です。